人文科学研究　第一五巻　二九―三九頁、二〇一九年三月

明治初期の新聞連載に見られる語彙と表記の特徴
――『安愚楽鍋』から『仮名読新聞』「開化謔競」への展開――

石井　久美子

一　『安愚楽鍋』と『仮名読新聞』「開化謔競」とその研究

『安愚楽鍋』は、戯作者仮名垣魯文によって書かれた作品である。全三編から成り、初編と二編は明治四年、三編は明治五年に刊行された。「流行の牛鍋屋に場面を固定」し、「旧時代的人物や新時代を謳歌する人物や風俗などを登場人物のことばを通じて描い」た作品である（興津一九九四）。

全一八話からなり、二〇名[1]が登場する、次のような話である。

〈初編〉西洋好の聴取、堕落個の廓話、鄙武士の獨盃、野幇間の諂諛、諸工人の俠言、生文人の會談

〈二編上〉娼妓の密肉食、半可の江湖談

〈二編下〉歌妓の坐敷話、文盲の無益論、人車の引力語、覆古の方今話

〈三編上〉商法個の胸會計、芝居者の身贔屓、藪医生の不養生、落語家の樂屋墮

〈三編下〉茶店女の隠食、新聞好の生鍋

『安愚楽鍋』の登場人物の言葉の位相を明らかにする研究として、漢語（鈴木一九七二、飛田一九七八）、外来語（椎野一九七九）、表記（飛田一九八八、岡本一九九一、石井二〇一二）、音訛（古田一九七七a、古田一九七七b）、指定表現（飛田一九七〇）、否定表現（飛田一九七四a）、自称代名詞と対称代名詞（鈴木一九七三、森川一九八二、杉崎一九九三）、文体（永尾一九六七）、待遇表現（飛田一九七四b）を対象としたものが見られ、日本語学的に注目されてきた作品である。

本稿で取り上げる「開化謔競」は、『仮名読新聞』に一二回にわたって掲載されたものである。『仮名読新聞』は、明治八年一一月一日から明治一三年一〇月二九日まで一四〇〇号にわたって刊行された小新聞である。明治一〇年三月一七日（三一二号）より『かなよみ』に改題している。編集は仮名垣魯文を中心に、仮名垣派の戯作者によって行われた。『仮名読新聞』の先行研究には、宛字（潘二〇〇七）、仮名字体と仮名遣い（銭谷二〇一〇）、外来語（石井二〇一四）、断定の助動詞（蔡二〇一〇a）、否定の助動詞（蔡二〇一〇b）に関する論文がある。

本稿で資料とする「開化謔競」について、「復刻『仮名読新聞』解説」には、「明治十年四月から八月にかけて「仮名読珍聞」欄に連載された「開化謔競」は、内容も文体も『安愚楽鍋』の続編というべきものである」と指摘されている。確かに、「開化謔競」の構成は『安愚楽鍋』とよく似ていて、各回が一人の人物の語りから成り、[2]話している様子が挿絵として載せられている。登場人物は、《全盛》が二回にわたっているため、一一名である。個々の話にはタイトルが付けられており、表1に示したように、「〜めかす〜のうそ」[3]という形式が基本となっている。タイトルにもあるようにいずれも嘘をついており、自分の能力の高さや人気を誇張したり、知ったかぶりをしたりするような内容を持つ。中には嘘が露見し、ごまかしたり逃げ出したりするような態度を取っている人もいる。

各回の冒頭には、『安愚楽鍋』と同様に、登場人物の年齢や身なり、癖などを説明した部分が見られる。[4]ただし、その体裁は異なっており、『安愚楽鍋』では割書にされ、仮名を主として書かれているが、「開化謔競」では他の箇所と区別なく、同じ大きさの活字で、漢字ひらがな交じり文で書かれている。『仮名読新聞』は活字で印刷されており、「開化謔競」には、振り漢字や左振り仮名の使用が見られず、右振り仮名の付された漢字ひらがな交じり文という体裁が徹底している。

作者は、表1に示したように明記されている場合がある。土屋（一九九二）は、仮名垣魯文が「弟子や投書家とともに新たな戯作の試みを紙上で行っていたようだ」と述べる。常連投稿者が筆名で執筆しており、第四回と第八回の「芝米洲」は書肆・戯作者の清水市次郎、第九回の筆者「風也房」は煙草商の広島久七、第一一回の「つばめ」は貿易商の富田砂燕である。[5]無署名のものについては仮名垣魯文の作だと推測されている（土屋一九九二）。

一方で、これまでに「開化謔競」を取り上げた研究は、石井（二〇一二）

表１　「開化謔競」の掲載状況一覧

略称		タイトル	筆者	掲載年月日	掲載号	掲載欄
①投書家	第一	擬投書家誕（とうしよかめかすうそ）	品川　鍬塚百章	明治10年４月23日（月）	346号	仮名読珍聞
②大姉	第二	擬大姉藝妓の法螺（おほあねへぶるげいしや　ほら）		明治10年４月28日（土）	350号	仮名読珍聞
③書生	第三	擬西洋書生誕（せいようめかすしよせいのうそ）		明治10年４月30日（月）	352号	新聞
④法律家	第四	擬法律家代言謔（はうりつかめかすだいげんのうそ）	芝米洲	明治10年５月６日（日）	357号	仮名読珍聞
⑤劇場通	第五	擬劇場通半可誕（しはるつうめかすにたやまのうそ）	深川一齋陸中	明治10年５月11日（金）	361号	仮名読珍聞
⑥猫	第六	擬譯知動亂猫食言（わけしりぬかすとらねこのうそ）		明治10年５月18日（金）	367号	仮名読珍聞
⑦良医	第七	擬良醫庸土妄誕（りやうゐめかすやぶいしやのうそ）	小山代三郎述	明治10年５月24日（木）	372号	仮名読珍聞
⑧全盛	第拾	擬全盛空房娼謔（せんせいめかすおちやひきのうそ）	芝米洲	明治10年５月31日（木）	378号	仮名読珍聞
⑧’	つづき			明治10年６月２日（土）	380号	仮名読珍聞
⑨宗匠	第九	擬宗匠俳諧天狗詐（そうしやうめかすはいかいてんぐのうそ）	風也坊	明治10年６月10日（日）	387号	仮名読珍聞
⑩新聞記者	第十	擬盛大新聞記者虚（せいだいめかすしんぶんきしやのうそ）	金春猫吉投書	明治10年６月16日（土）	392号	仮名読珍聞
⑪大通	第十一	賽大通生域虚（だいつうめかすなまいきのうそ）	横灣　つばめ稿	明治10年８月20日（日）	448号	仮名読珍聞

のみである。そこでは、「開化諧競」の振り仮名について、漢字の訓み通りかそうでないかの割合が『安愚楽鍋』と似通っていることを示し、さらに「開化諧競」には次の五点の特徴があることを指摘している。

① 右振り仮名のみであり、両振り仮名や右振り漢字、左振り漢字は登場しない

② 振り仮名のない漢字表記と、部分ルビを付した表記の数が少なく、「日本（にっぽん）」のように振り仮名のない箇所は数字に集中して見られる

③ 各回のタイトルが「擬投書家誕（とうしょかめかすうそ）」のように、漢字の並びに対し、句や文の単位での振り仮名になっている

④ 音訛・標準外の音を示す振り仮名が少なく、人物像の形成には用いられていない

⑤ 外来語の振り仮名が使用者のことばの特徴を表す振り仮名として使われている

しかし、これは「開化諧競」の振り仮名のみに特化した指摘であり、各回の違いについてはほとんど触れられていないので、その実態を複合的に考える必要がある。そこで、『安愚楽鍋』の先行研究の方法と成果を踏まえて、「続編」と呼ばれる「開化諧競」の語彙と表記の特徴を多角的に分析し、『安愚楽鍋』からの展開の様相を明らかにする。

二 「開化諧競」の特徴

以下では、「開化諧競」を漢語や外来語の使用状況、自称代名詞・対称代名詞、指定表現、音訛の観点から『安愚楽鍋』の先行研究と対照させ、その特徴を捉える。

二―一 漢語の使用状況

表2は、漢語の使用率の高い順に語種別の出現状況を示したものである。鈴木（一九七二）では、『安愚楽鍋』は話の中で漢語を用いる割合が高く、それらの漢語が漢字で表記される割合の高い人物を「漢語使用層」と呼んでいる。「開化諧競」では、《新聞記者》《良医》《法律家》の漢語の割合が高く、やはり知識人と呼ばれる教養層である。

また、漢語使用層とともに、注目されるのは女性である。「開化諧競」には、《大姉》《猫》《全盛》の三名が登場しており、いずれも芸娼妓である。漢語の使用率は低く、かわりに和語の使用率が高くなっている。漢語の表記については、『安愚楽鍋』では、女性の登場人物や非教養層の場合に、漢語をあえてひらがな書きするという方法が行われているが、「開化諧競」にはそうした表記は見られない。

次に、漢語に付された振り仮名に注目すると、「新聞（しんぶん）」「失敬（しっけい）」のように訓み通りのものがある一方で、①「對話（はなし）」のように振り仮名が和語の場合、②「藝妓（げいしゃ）」のように振り仮名も漢語だが、漢字で表された漢語の訓みとは一致しない場合がある。

「本行漢語＋ルビ和語」[6]の形式には次のような例が見られる。

身体（からだ）　装飾（こしらへ）　年齢（としごろ）　廓内（なか）　高利金（からすがね）　到底（つまり）　巨大（おほきく）　窮迫い（くるし）　了解（わかる）　饒舌（しゃべる）　罵詈（どくづか）れた

人物別にこの形式の出現数（延べ語数）の多い順に並べると、一位三一語《全盛》、二位二五語《大姉》、三位二四語《猫》《大通》となり、上位を女性が占める。男性の場合はその出現数を平均すると、一四・六三語にとどまる。歴史的に見て、和語は女性、漢語は男性と結びつきやすいと言われるが、その人物の語りを示す振り仮名において、女性の方が和語が多くなるのはそのためと考えられる。なお、振り仮名部分の品詞は、名詞（俗語・

集団語を含む）、副詞、形容詞、動詞と幅広い。

一方、「本行漢語＋ルビ漢語」の形式には次のような例が見られる。

藝妓　容貌　説諭
書籍　纏頭　利子
通語　俳優　再度
放蕩　瀉車　割烹店

女性は漢語の使用率が低いが、「本行漢語＋ルビ漢語」に関してはいずれの人物も延べ語数が二桁という多数になっている。ここで用いられている漢語には、『日本国語大辞典第二版』で初出を明治以降とする漢語が含まれている。その際、「説諭」「回」「藝妓」「書籍」「割烹店」のように本行の漢語のみが明治以降に見られるようになった新しい語である場合と、「誇言」「瀉車」「代言」のように本行も振り仮名もどちらの漢語も明治以降に見られるようになった新しい語である場合の二つのパターンが見られる。[7] 明治初年に刊行された『安愚楽鍋』にはどちらもあまり見られない形式であり、時代的な新漢語の増加を見ることができる。

表２　「開化謔競」における語種別の出現状況（漢語比率の高い順）

	和語		漢語		外来語		混種語		固有名詞		文節数		性別
⑩新聞記者	117	41.6%	121	43.1%	2	0.7%	35	12.5%	6	2.1%	281	100.0%	男
⑦良医	298	61.8%	152	31.5%	4	0.8%	24	5.0%	4	0.8%	482	100.0%	男
④法律家	230	56.7%	117	28.8%	2	0.5%	45	11.1%	12	3.0%	406	100.0%	男
③書生	342	60.4%	126	22.3%	18	3.2%	56	9.9%	24	4.2%	566	100.0%	男
⑨宗匠	324	70.7%	100	21.8%	1	0.2%	19	4.1%	14	3.1%	458	100.0%	男
②大姉	404	71.4%	94	16.6%	1	0.2%	48	8.5%	19	3.4%	566	100.0%	女
①投書家	336	68.4%	78	15.9%	8	1.6%	13	2.6%	56	11.4%	491	100.0%	男
⑧全盛	515	72.9%	109	15.4%	0	0.0%	55	7.8%	27	3.8%	706	100.0%	女
⑥猫	328	72.6%	67	14.8%	1	0.2%	36	8.0%	20	4.4%	452	100.0%	女
⑪大通	202	78.3%	36	14.0%	3	1.2%	11	4.3%	6	2.3%	258	100.0%	男
⑤劇場通	340	77.6%	56	12.8%	2	0.5%	27	6.2%	13	3.0%	438	100.0%	男

二―二　外来語の使用状況

外来語の出現状況を見ると、第八回の《全盛》のつづきが書かれた回以外は、全ての回に外来語が見られる。具体例は次の通りである。

金巾　更紗　洋犬　襦半　一角　新聞　倫敦
ビル　アルミ　アフリカ　サンフランシスコ

椎野（一九七九）は、『安愚楽鍋』の人物説明部分に外来語が見られるのは西洋好、商法個、新聞好のみとするが、[8]「開化謔競」では、《大通》を除いて外来語が見られる。「開化謔競」全体の高頻度語として、〝たばこ〟が八回（「煙草」四回、「莨」三回、「烟草」一回）、〝きせる〟が七回（「煙管」四回、「吸管」一回、「烟草」一回、「きせる」一回）見られる。

各人物の外来語使用率を、一話あたりの文節数で割って算出すると、表3のようになる。一位が《書生》、二位が《法律家》、三位が《投書家》である。特に、《書生》はタイトルにも「擬西洋書生誕」とあるように、西洋に通じているように振る舞っている様子が、外来語の量の多さに現れている。一方で、女性（《大姉》《全盛》《猫》）はいずれも外来語の使用率が低いのが特徴である。

『仮名読新聞』の外来語は、石井（二〇一四）の調査では、「本行漢字＋ルビひらがな」の形式と、「カタカナのみ」の表記がほぼ同数という結果であった。しかし、「開化謔競」のみでは、「本行漢字＋ルビひらがな」の表記がほとんどであった。ただし、外来語出現数が最多の《書生》は、表記のバラエティに富み、カタカナ書きの語が一九語と半数近くを占める。

外来語が「本行漢字＋ルビひらがな」の形式で表記される場合、漢字ひらがな交じり文の中ではほとんど目立たない存在であるのに対し、カタカナのみで表記される形式は、文章の中で外来語の使用が目立つ。《書生》では、カタカナのみの表記によって、外来語の多用を視覚的にも表していると考えられる。一方で、カタカナのみの場合、振り仮名と漢字の二重表記とは異なって、意味の理解を促進する漢字がないことになる。しかし、「ポルチユワイン」「グランドホテル」「ウヲートル一滴も混へず」といった語の前後を見ると、「洋酒」「外國人大旅店」「水ツ氣のない一本生」のように、手がかりとなる語句が見られ、文脈によってその外来語の意味がわかるように書かれているとわかる。

さらに、外来語の使用率が一位の《書生》と二位の《法律家》には、次のように、地名が多数用いられ、外来語の数を増やす一因となっている。(9)

《書生》エジプト　スエス　シベリヤ　サンフランシスコ
あふりか　獨逸　英吉利　倫頓　支那　印度　日本　日本
英　佛

表３　「開化諧競」における外来語の使用状況

	延べ	異なり	文節数	外来語の割合（延べ/文節数）
③書生	47	39	566	8.3%
④法律家	11	10	406	2.7%
①投書家	10	7	491	2.0%
⑩新聞記者	4	4	281	1.4%
⑪大通	3	3	258	1.2%
⑦良医	5	5	482	1.0%
⑤劇場通	4	3	438	0.9%
②大姉	3	3	566	0.5%
⑨宗匠	2	2	458	0.4%
⑧全盛	2	2	706	0.3%
⑥猫	1	1	452	0.2%

《法律家》アフリカ　亞弗利加　土耳其　支那　台灣　英國

このように、日本の中のことだけでなく、海外へも目が向けられているということが使用語句に現れている。

二―三　自称代名詞と対称代名詞

自称代名詞・対称代名詞について、話し手の位相に注目し、階層や性別と関係して使い分けられている例を取り上げる。

（一）自称代名詞

「開化諧競」に出現する自称代名詞は、表４に挙げたように、「僕」「我輩／吾輩」「吾輩」「私／妾」「妾／妾き」「拙」「我々共」の七種類（表記は一〇種類）である。以下、話し手の位相に注目して分析する。

「ぼく」は、「江戸時代の漢文から「ぼく」の形で、対等もしくは目下の者に対する自称の代名詞として青年・書生などが使った」ものである（『日本国語大辞典第二版』）。『安愚楽鍋』でも漢語使用層の人物が多く用いていたが、「開化諧競」では、《新聞記者》《良医》《法律家》《投書家》が「僕」を使用している。このうち、《新聞記者》《良医》《法律家》は漢語の使用率の高い教養層であるが、《投書家》は、和語の使用率が高い人物である。《投書家》は、話の内容から本当は新聞事情に疎い人物であり、「僕」を用いて教養があるように振る舞ってはいるが、実際は非教養層であると考えられる。「わがはい」は、北澤・祁・趙（二〇一〇）によれば、「使用者が専ら官員層と知識層」であるとされ、「開化諧競」でも《法律家》と《書生》が用いている。

そして、『安愚楽鍋』では、非教養層が使用している「おれ」「おいら」「おら」などは「開化諧競」には出現しておらず、「こちとら」のみ見られる。自称代名詞が偏って見られるのは、男性登場人物がいずれも知識ある

人物として振る舞っているためだと考えられる。そうした中に「こちとら」が見られる。『安愚楽鍋』では、諸工人・馬という非教養層の自称代名詞として用いられている（鈴木一九七三）。

表４　「開化謔競」における自称・対称代名詞（漢語比率の高い順）

略称	自称	対称	性別
⑩新聞記者	僕（ぼく）	貴妓様（きさまたち）	男
⑦良医	僕（ぼく）	貴公方（おまへがた）	男
④法律家	我輩（わがはい） 僕（ぼく）	貴君（あなた）	男
③書生	我輩（わがはい） 吾輩（わがはい）	君（きみ）	男
⑨宗匠	拙（せつ）	君（きみ）	男
②大姉	妾（わたし）	お前（まへ） お前達（まへたち）	女
①投書家	僕（ぼく）	君（きみ）	男
⑧全盛	妾き（わち） 妾（わちき）	おまはん	女
⑥猫	私（わたし）	お前（まへ）	女
⑪大通	我々共（われわれども）		男
⑤劇場通	我輩（こちとら）		男

「開化謔競」では《劇場通》が使用しているが、彼も芝居通ぶっているだけで、実体は「半可（にたやま）」であり、「こちとら」という自称代名詞の混入に非教養層であることが現れている。

「拙」は男性が用い、自分をへりくだっていう語である。「開化謔競」では、《宗匠》が使用している。本文中には発言が出てこないが、「君」と呼びかけている人物がその場に存在している。俳諧の世界の初心者である相手に対し、宗匠ぶった態度をとっているが、「拙」というへりくだった表現を用いている。

《大通》の使う「我々共」は、連れの人と話している本人という意味で用いており、複数であることを表している。今の世の中には無駄な人間であるという謙遜の意を含む文脈だが、連れに話しかけるようにしながら、近くの女性に聞かせる目的もあるという場面で用いられている。

「わたし」は「近世においては女性が多く用い、ことに武家階級の男性は用いなかった」語であり、「わちき」は「江戸の芸娼妓の用いた語」である（『日本国語大辞典第二版』）。「開化謔競」でも、「わたし」と「わちき」は女性かつ芸娼妓である登場人物の《大姉》《全盛》《猫》の自称に用いられている。

（二）対称代名詞

「開化謔競」に出現する対称代名詞は、表４に挙げたように、「君（きみ）」「お前（まへ）」「お前達（まへたち）」「貴公方（おまへがた）」「おまはん」「貴君（あなた）」「貴妓様（きさまたち）」の七種類である。このうち、「君（きみ）」「お前（まへ）」「おまはん」を使用する話し手の位相に注目する。

「君」は、《投書家》《書生》《宗匠》が用いている。『安愚楽鍋』では「僕」との対応が指摘されていたが（鈴木一九七三）、「開化謔競」では「君」「僕」の両方を用いているのは《投書家》だけである。「君」は、「江戸時代には（中略）、口語的場面で謙称の自称の「ボク」と対になり、武士階級同士で対等の立場で相手を呼ぶ語となった。これが明治時代の書生言葉に受け継がれ、現在まで、主として男性語として対等もしくは目下の相手に対して用いられている。」（『日本国語大辞典第二版』）となっており、「君」は書生言葉として用いられていると考えられる。

「おまへ」は、『安愚楽鍋』では女性のみに用いられていたが（杉崎一九九三）、「開化謔競」でも《大姉》《猫》という女性が用いている。もう一人の女性である《全盛》は、「おまはん」を用いている。これは「江戸時代、おもに遊里ことばとして、芸妓や女郎が客に対して用いた」語である（『日本国語大辞典第二版』）。

自称代名詞と同じく、対称代名詞にも江戸語が受け継がれており、さらには、「君」のように明治時代の書生言葉としての使用も見られる。「開化諧競」の代名詞は、うそくらべというテーマに沿った偏りはあるが、性差の描き分けや、実体を示す自称代名詞の混入などに登場人物の位相差が現れていることがわかる。

二―四　指定表現

『仮名読新聞』の断定の助動詞についての研究には、蔡（二〇一〇a）があり、その用例数と使用率を次のように示している。ただし、「開化諧競」のほとんどが掲載されている「仮名読珍聞」欄は調査対象外である。[10]

一位「だ」一三〇〇例（四五・七％）
二位「なり」八〇八例（二八・四％）
三位「であります」三〇九例（一〇・九％）
四位「である」一九九例（七・〇％）
五位「です」一三七例（四・八％）

『安愚楽鍋』の指定表現について、飛田（一九七〇）は、次のように分類している。

男　ジヤの使用者…士族・知識人
　ジヤ・デゴゼエス・デゲスの不使用者…商人・商人以外
　デゴゼエス・デゲスの使用者…落語家・幇間・西洋好
　ダだけの使用者…職人・文盲の男・なまけものの男・あくぬけした男・牛・馬
女　ザンス・ザマス・ダマスの使用者…遊女
　ザンス・ザマス・ダマスの不使用者…遊女以外

それに対して、「開化諧競」では、ほとんどが「だ」を用いている。《新聞記者》《大姉》《劇場通》には「だ」のみが使用されており、《法律家》《書生》《宗匠》《投書家》《大通》はさらに「なり」も用いている。「だ」が最も多く、「なり」の併用が次に多いのは、蔡（二〇一〇a）の『仮名読新聞』全体の傾向と一致している。一方で、士族や知識人の用いる「ジヤ」、遊女特有の「ザンス」「ザマス」「ダマス」は、表5に示したように、「開化諧競」には見られない。

一方で、特異な語を用いている例は次の通りである。[11]

でごす＝《良医》、でげす＝《宗匠》、です＝《全盛》《猫》

「ごす」は、「ごっす」の変化した語であり、「ごっす」は「近世後期の江戸の男性語。多く、医師、俳諧師、遊び人などが用いた」語である（『日本国語大辞典第二版』）。「開化諧競」でも医師らしい言葉として用いられている。また、「げす」も「江戸末期から明治にかけて、芸人や通人、職人の間に用いられることが多かった」（『日本国語大辞典第二版』）とあり、宗匠という通人らしい言葉遣いとなっている。

そして、「です」を用いている《全盛》《猫》はいずれも女性である。女性の登場人物が「です」を用いているという結果は、『安愚楽鍋』と一致している。「です」は、「明治以前は遊里、芸人の語とされ、明治以後、広く用いられるようになったものの、しばらくは上品でない語感を保ち、現在で

表5　「開化諧競」の指定表現の出現状況（漢語比率の高い順）

	指定	性別
⑩新聞記者	だ	男
⑦良医	だ・でごす	男
④法律家	だ・なり	男
③書生	だ・なり	男
⑨宗匠	でげす・なり・だ	男
②大姉	だ	女
①投書家	だ・なり	男
⑧全盛	です・だ	女
⑥猫	だ・です	女
⑪大通	だ・なり	男
⑤劇場通	だ	男

も、「です」より一段丁寧なものとして「ございます」が用いられる。」（『日本国語大辞典第二版』）と説明されており、芸娼妓という職業が反映されていると考えられる。

指定表現は、これが載せられている新聞という媒体の影響が見られるが、そうした中にも登場人物の位相の描き分けが行われている。

二―五　音節の融合と連母音の長音化

『安愚楽鍋』の音訛については、古田（一九七七a、一九七七b）が、知識・教養層、女性、それ以外に分類して考察している。それによれば、知識・教養層はほとんど訛らず、女性は音節の融合（デワ→ジャー等）は見られるが、連母音の長音化はほとんど見られず、それ以外の人物には、音訛が見られるという。

音節の融合は、「開化謔競」の場合も、表6に示したように、女性（《大姉》《猫》《全盛》）の全員に認められる。男性では、教養層には見られず、その他の階層の男性に見られる。原形と融合形を対照させると、デワ→ジャーという音訛形の出現が最も多く、ニワ→ニャー、レバ・リワ→リャー、テワ→チャーも用いられている。以下に具体例を挙げる。

《大姉》「道普請じやアない」「纏頭じやア」「潔白じやアないかね」「欲張るのじやアない」「お前の前でいふのじやアない」「替りにやア」「無けりやア」

《猫》「提られないわけじやアないか」「萌生藝者にやア勤まらないヨ」「有難事にやア」「左様いつちやア惡いが」

《全盛》「おまはんの前じやア言にくい」

《大通》「今じやア」「平凡な事じやア無へてねー」「世の中にやア」「蹂廻す時分にやア」「藝人にやア」「道中にやア」「見なけりやアならずさ」「夫よりやア」

《劇場通》「五無沙汰じやア行ないぜ」「見へて來た日にやア」「斯様申ちやア失敬だが」

《宗匠》「是ジヤア」

表6　「開化謔競」の否定表現と音訛の出現状況（漢語比率の高い順）

略称	否定（助動詞）	否定	連母音の音訛	音節の融合形	性別
⑩新聞記者	ナイ・ヌ	【助動】ない・ぬ 【形】ない	無	無	男
⑦良医	ナイ・ヌ	【助動】ない・ぬ（ず） 【形】ない	無	無	男
④法律家	ナイ・ヌ・ン	【助動】ない・ぬ（ず）・ん 【形】ない	無	無	男
③書生	ナイ・ヌ	【助動】ない・ぬ（ず）	無	有	男
⑨宗匠	ン	【助動】ねへ（めへ）・ん・ず	有	有	男
②大姉	ナイ・ヌ	【助動】ない・ず 【形】ない（なし）	無	有	女
①投書家	ナイ・ネエ・ヌ・ン	【助動】ない・ぬ（ず・ざる）・ん 【形】ない	有	有	男
⑧全盛	ナイ・ン	【助動】ん・ない 【形】ない	無	有	女
⑥猫	ナイ・ヌ	【助動】ない・ず 【形】ない	無	有	女
⑪大通	ナイ・ネエ	【助動】ない・ねへ・ず 【形】ない	有	有	男
⑤劇場通	ナイ・ネエ・ヌ	【助動】ない・ねへ・ぬ（ず） 【形】ない	有	有	男

《投書家》「行かれめへじゃアねへか」
《書生》「手際なものじやアないか」

連母音の長音化は、「開化諧競」ではほとんど見られず、使用人物に偏りが見られ、アイ→エーとなるもの、特に否定表現ナイがネエ[12]となる例が多数を占める。

《大通》「適ねへはサ」「鼻持がならねへ」「青ツ臭へ」「たまらねへ」「弁へねへで」「お互へ」「見た事もねへ」「一回は逢てへ」「知る人に成てへ」「平凡な事じやア無へて」
《劇場通》「貴殿さん方」「左様サ違へねへ」
《投書家》「行かれめへじゃアねへか」
《宗匠》「貸て呉めへ」

音訛は、教養層らしく振る舞っている人物が多いこともあり、『安愚楽鍋』ほど顕著ではないが、その実体が非教養層であることがわかる描き方となっている。

三　むすび――『安愚楽鍋』から「開化諧競」へ

本稿では、『仮名読新聞』に掲載された「開化諧競」を、『安愚楽鍋』の先行研究の成果をもとに、漢語や外来語の使用状況、自称代名詞・対称代名詞、指定表現、音訛という観点から分析してきた。その結果、『安愚楽鍋』の「続編」と言われているように、登場人物の位相が反映され、それぞれの人物の言葉がステレオタイプ化されていることが明らかになった。分類すれば次の通りである。大きく男性A～Cと女性Dに分けることができ、男性はAの教養層からBCと階層が低くなっている。

A《新聞記者》《良医》《法律家》
　漢語の多用、「僕」の使用、音節の融合形の不使用
B《宗匠》《書生》
　ネエの不使用、音節の融合形の使用
C《大通》《投書家》《劇場通》
　ネエの使用、「こちとら」の使用
D《大姉》《猫》《全盛》
　「です」の使用、「わたし」「わちき」「おまへ」「おまはん」の使用

しかし、『安愚楽鍋』の方法をまったく変えずに踏襲しているというわけではない。「開化諧競」では、うそくらべというテーマが設けられている。男性の登場人物がそれらしく振る舞っている職業は専門職や文化に造詣の深い人々であるため、『安愚楽鍋』よりも、非教養層に見られるとされる自称代名詞・対称代名詞や音訛の種類や数が少なくなっている。描き分けられている箇所では、教養層らしく見せかけている中に非教養層の言葉遣いが混じり、その正体が現れているという面白さがある。

さらに、『安愚楽鍋』と「開化諧競」の違いは媒体によるところも大きい。登場人物の外見的特徴等を説明した後、語りが記述されているという構造は同じだが、版本である『安愚楽鍋』で用いられている左振り仮名や振り漢字の使用、人物説明部分や注記としての割書、そして漢語を話し手によってひらがなに開いた表記にすることは、活字を用いた「開化諧競」には見られない。

また、指定表現では、「開化諧競」は、ダやナリが多く、『安愚楽鍋』と比べて、ジヤ、デゴゼエス、ザンス・ザマス・ダマスが用いられず、種類が少ない。こうした『安愚楽鍋』との違いは、『仮名読新聞』全体の傾向と一致している。これは、新聞という掲載媒体が、版本に比べ短期間で記事を仕上げる必要があり、紙幅にも制限があるため、表現のバリエーションに制限を与えているのだと考えられる。

テーマを設定し、活字を用いた新聞という媒体に載せることは、江戸か

ら引き継がれてきたステレオタイプ的な描き方を土台としながらも、その簡素化につながった。それによって書き手は仮名垣魯文だけでなく、弟子や読者である常連投稿者によっても試みられ、複数の手で作り上げることができたのではないか。つまり、「開化謔競」は『安愚楽鍋』の続編であるとともに、うそくらべというテーマと、新聞という媒体に合わせて、登場人物の位相差を反映した描き分けをスリム化して実現した作品なのである。

注

（1）論考によっては、話題の中に登場する人物も含めたものがあるが、ここで挙げたのは、牛鍋屋にいて発話している人物である。

（2）『安愚楽鍋』には対話形式のものが二話見られるが、「開化謔競」にはない。

（3）タイトルの「うそ」という振り仮名と対応する漢字には、「誕」（＝でたらめを言うこと）、「詐」（＝事実でないことやあてにならないことを言ったりしたりすること）、「食言」（＝うそをつくこと）、「妄誕」（＝言説に根拠がないこと）、「謔」（＝冗談を言うこと）、「虚」（＝事実でないこと）が用いられている。どのような〝うそ〟であるかが漢字によって示されている。なお、漢字の意味はいずれも『日本国語大辞典第二版』を参照した。

（4）本稿では人物説明部分と語り部分を区別せずに取り上げている。

（5）筆名と本名の対照には、石堂（二〇一四）を参照した。

（6）「本行漢語＋ルビ和語」の形式とは、「対話（はなし）」のような例のことである。本行とは「對話」の部分、ルビとは「はなし」の部分を表す。

（7）本行の漢語のみが新しいものは、説諭（いけん）（説諭＝『航米日録』一八六〇）、回（だん）（回＝『西国立志編』一八七〇～七一）、藝妓（げいしゃ）（芸妓＝『東京新繁盛記』一八七四～七六）、書籍（しょもつ）（書籍＝『改正増補和英語林集成』一八八六）、割烹店（りゃうりゃ）（割烹店＝『安愚楽鍋』一八七二）である。本行も振り仮名もどちらの漢語も新しいものには、誇言（ふげん）（誇言＝『漢語字類』一八六九、誣言＝『音訓新聞字引』一八七六）、滊車（じゃうき）（滊車＝『広益熟字典』一八七四、蒸気＝歌舞伎「繰返開花婦貝月」一八七四）、代言（だんげん）（代言＝『明六雑誌』一八七五、断言＝『哲学字彙』一八八一）がある。

（8）ただし、椎野（一九七九）は、外来語の調査範囲を下記のようにしており、本稿よりも狭義に捉えている。

「かなきん」「めりやす」「てんぷら」「合羽」「らしや」「たばこ」「きせる」「さらさ」などの語が見られるが、これらの語は既に江戸初期に日本語にとりいれられ、人々に身近なかな語となっていたと考えられる。今これも考察の外におく。

（9）本稿では、「英」「佛」など外国地名の略称も外来語として数えている。

（10）「開化謔競」の各回の掲載欄は表1に示している。

（11）『安愚楽鍋』では、「でごす」は西洋好、「でげす」は西洋好と野幇間が使っている。

（12）飛田（一九七四a）で、本文中で「ねへ」と書かれているものを「ネエ」と総称しているため、その表現に倣った。

参考文献

石井久美子（二〇一二）「『安愚楽鍋』における振り仮名の研究」『国文』第一一八号、三六～四六頁（石井久美子（二〇一四）「『安愚楽鍋』における振り仮名の研究」『漢字文化研究』第四号、平成二十五年度漢検漢字文化研究奨励賞受賞論文集、公益財団法人日本漢字能力検定協会、五～一四頁（再掲））

石井久美子（二〇一四）「『仮名読新聞』の外来語」『国語文字史の研究』一四、一七一～一八五頁

石堂彰彦（二〇一四）「一八七〇年代の小新聞投書者について」『成蹊人文研究』第二二号、三一～四五頁

岡本美保（一九九一）「安愚楽鍋におけることばの諸相―廃語と片仮名表記語の面から―」『熊本女子大学国文研究』第三七号、四二～五二頁

興津要・前田愛（一九七〇）『日本近代文学大系第1巻　明治開化期文学集』角川書店

興津要（一九九四）『仮名垣魯文―文明開化の戯作者―』有隣堂

北澤尚・祁福鼎・趙宏（二〇一〇）「近代日本語の自称詞「わがはい」の共時的特性と動態について」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』Ⅰ六一、一三～二六頁

蔡欣吟（二〇一〇a）「『仮名読新聞』における断定の助動詞について」『文学研究論集』三三、一七～三一頁
蔡欣吟（二〇一〇b）「『仮名読新聞』における否定の助動詞について」『文化継承学研究』七、二五～四〇頁
斎賀秀夫・飛田良文・梶原滉太郎（一九七五）『国立国語研究所資料集9 牛店雑談安愚楽鍋用語索引』秀英出版
椎野正之（一九七九）「牛店雑談安愚楽鍋における外来語」『文化紀要』一三、三七～五六頁
杉崎夏夫（一九九三）「『安愚楽鍋』の研究（1）」『智山学報』四二、三二七～三四四頁
鈴木英夫（一九七二）「『安愚楽鍋』にみられる漢語とその表記について」『共立女子大学短期大学（文科）紀要』第一五号、一三～二九頁
鈴木英夫（一九七三）「『安愚楽鍋』の語法」『共立女子大学短期大学（文科）紀要』第一七号、三〇～四八頁
銭谷真人（二〇一〇）「『仮名読新聞』における仮名字体および仮名文字遣い」『日本語学研究と資料』三三、一～三二頁
土屋礼子（二〇〇二）『大衆紙の源流―明治期小新聞の研究―』世界思想社
永尾章曹（一九六七）「牛店雑談安愚楽鍋の文体について」『国文学攷』四三、一八八～一九六頁
日本近代文学館・小田切進編（一九七八）『日本近代文学大事典　第五巻』講談社
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（二〇〇〇―二〇〇二）『日本国語大辞典　第二版』小学館
潘鈞（二〇〇七）「明治期の漢字表記の一側面―当時三種の小新聞における「あて字」を資料として―」国語文字史研究会編『国語文字史の研究一〇』和泉書院、一九五～二一二頁
飛田良文（一九七〇）「明治初期東京語の指定表現体系―方言と社会構造の関係―」平山輝男博士還暦記念会編『方言研究の問題点』明治書院、九〇二～九一二頁
飛田良文（一九七四a）「明治初期東京語の否定表現体系―『安愚楽鍋』における「ない」「ねえ」「ぬ」「ん」の用法―」『国立国語研究所論集5　ことばの研究　第5集』一～四四頁
飛田良文（一九七四b）「明治初期作品の敬語」『敬語講座5　明治大正時代の敬語』明治書院、三七～八三頁
飛田良文（一九七八）「明治初期東京人の階層と語種との関係―『安愚楽鍋』を中心として―」国立国語研究所『国立国語研究所報告62　研究報告集―1―』一九八～二三〇頁
飛田良文（一九八八）「『安愚楽鍋』の漢字」佐藤喜代治編『漢字講座第九巻　近代文学と漢字』明治書院、三五～七四頁
古田東朔（一九七七a）「『安愚楽鍋』の登場人物とその音訛」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院、六三三～六八四頁
古田東朔（一九七七b）「『安愚楽鍋』における登場人物の音訛の度合」『東京大学教養学部人文科学科紀要』六七、七五～一九二頁
古田東朔（二〇一二）『古田東朔現代日本語生成史コレクション第一巻』くろしお出版
松村明（一九九八）『増補江戸語東京語の研究』東京堂出版
森岡健二（一九八八）『現代語研究シリーズ第五巻　文体と表現』明治書院
森川知史（一九八二）「明治開化期の待遇表現―『安愚楽鍋』にみえる敬語―」『国文学論叢』二七、一～一四頁
山本武利監修、土屋礼子編集・解説（一九九二）『復刻仮名読新聞』第一～九巻、明石書店

謝辞　本稿は、第三五三回日本近代語研究会春季大会（平成三〇年五月一八日於明治大学駿河台キャンパス）にて、「明治期の新聞連載に見る語彙的特徴―『安愚楽鍋』から『仮名読新聞』へ―」の題で発表したものを改題・改稿したものです。発表時にご教示いただいたことをもとに加筆・修正致しました。ご助言いただいた先生方に深く感謝申し上げます。